

To a God Unknown 再考

中 地 晃

Steinbeck の作品の中で、*To a God Unknown* (1933) が異色作であることは、French の言う通りである。⁽¹⁾ ここには、*The Pastures of Heaven* (1932)、*Tortilla Flat* (1935)、*Cannery Row* (1945) に見られるユーモアや諷刺はなく、また *In Dubious Battle* (1936)、*Of Mice and Men* (1937)、*The Grapes of Wrath* (1939) に見られる客観的なリアリズムもない。それは Watt の言うように或る観念を追求し表現すべく構成されていて、その意味でロマンチックであり、⁽²⁾ さらに Steinbeck の神秘主義的傾向が強く表われている。処女作の *Cup of Gold* (1929) とともに Steinbeck の習作と考えてよい作品であるが、ただそこには Watt が指摘する a passionate and haunting quality があって、⁽³⁾ 再考を誘うのである。

Edward F. Ricketts との交際が生んだとされる Steinbeck の non-teleological thinking は、後の作品に冷静な客観性を与え、主観や感情を suppress する方向に働いたと考えられるが、*To a God Unknown* は、Astro の言葉にかかわらず、⁽⁴⁾ nonteleological thinking の影響は未だ少く、激しい感情が渦まき、激しい行動があり、主人公 Joseph は狂人に見えるように書かれたかも知れないと Warren French に言わせる程である。⁽⁵⁾ French のこの発言は、*A Streetcar Named Desire* の主人公は Blanche でなくて Stanley だと言うに等しい誤りであるが、Joseph の行動とその最後の自殺の姿には、リアリズムの世界を超えた凄味があり、象徴的行動としての解釈が必要となるように思われる。

(1)

Warren French がこの作品を原型家族の崩壊を描いたとし、⁽⁶⁾ Joseph が中心とはいいながら、長兄 Thomas、次兄 Burton、弟 Benjy などについて述べたのに影響されてか、Lester Jay Marks や Richard Astro は類型的に描かれた minor characters の分析に興味を示しているが、Lisca、Watt、Fontenrose が Joseph に集中しているのは当然である。Watt が言うようにこの作品のテーマは fertility を求める Joseph の戦いであり、⁽⁷⁾ その姿に大自然の中の人間の姿が象徴されていることから考えて、Lisca の言うように minor characters は作品に perspective を与えている⁽⁸⁾ と考えて通過してもよいと考えられる。

この作品の迫力や意味は、旱魃という大自然の暴威と戦って敗れる Joseph Wayne の姿を通して描れるが、作者は、Joseph の死は敗北ではなく人類のための犠牲的行動であり、彼の勝利であるという二重構造で描いている。この二重構造は、Joseph の大自然に対する汎神論的態度や、彼の行う異教的儀式を通して、大自然の強大な力が間接的に表現されるという描き方から生れている。

東部の Vermont から土地を求めて Joseph がやって来た California の Nuestra Señora の自然については、土地の登記をすませた帰路に Joseph は自分の土地を見下して強く感動し、さらにテントの前で無意識の激情にかられて地面を抱きしめる行為を通してその異様な魅力が間接的に表現されるが、それが旱魃という大自然の暴威に脅かされる場所であることも、老駈者 Romas の語る 1880 年から 1890 年にかけての大旱魃の惨状で明らかにされる。Nuestra Señora の自然は豊かさの底に無気味な力を隠しているのであり、Joseph が家の傍の檜の木に死んだ父の霊が移り住んだと考え、それに話しかけたり捧げものをしたり等、異教的礼拝を行い、熱心なクリスチャンの次兄 Burton から非難されるが、その Joseph の行動も、彼が大自然に霊的なものを感じているという点において、大自然の持つ強大な力をうかがわせるものである。

Joseph は檜の木とともに、松林の中にある巨岩に神聖なものを感じていたが、妻 Elizabeth がそこで死んでからは、彼女の魂がその岩に入ったと思い、大旱魃で長兄 Thomas が家族や家畜をつれて避難してからはその巨岩のそばで生活を始め、巨岩が土地の象徴となり、巨岩が自己と分ちがたいものであることを意識する。

檜の木の場合と同様に、Joseph の自然崇拝や汎神論的傾向は、人間が本性として持つ宗教的傾向を示すものと考えられるが、一方、知られざる神を秘める大自然の無気味な強大な力が人間にそのような行為をさせるという意味で、それは自然の持つ強大な力を示すものである。

しかし、Joseph の祈りもむなしく大旱魃はやって来る。一年の日照り続きの後、土地は干上り、家畜は肋骨を見せ、野性の動物は続々と移動を始める。Joseph は Romas から家族、家畜をつれて 100 哩以上はなれた San Joaquin 河の彼方へ避難するように忠告される。彼は一時は移動を決心するが、出発前に出かけた小旅行で、夕日にいけにえを捧げる老人に会い、決心を変える。Thomas と家族、家畜の出発を見送った後で、Joseph は松林の中の巨岩のそばで生活を始める。地の底から湧き出ると思われる泉はまだ涸れない。Thomas からの手紙には 300 頭以上の牛が死んだとある。秋になり冬になるが雨は降らない。12月のある日、泉の水が増えたのは涸れる前触れであると Juanito に言われ、すすめられて Father Angelo の所へ雨乞いを頼みに行く。しかし断られる。巨岩の所へ戻ると泉は涸れている。彼は絶望するが、太陽にいけにえを捧げる不思議な老人を思い出し、仔牛をいけにえに捧げる。しかし効果はない。彼は土地を去ろうとするが彼の馬は走り去る。彼は落着きを取り戻して岩の上に上り、手首の血管を開く。

Joseph の死は明らかに敗北の自殺である。信仰も祈りも空しく、自殺に追い込まれる Joseph の姿にわれわれは知られざる神の無限の力を思い知らされるのである。作品の冒頭に引用されている Veda よりの詩は、原詩が短縮され変更されているが、この作品に描かれる強大な大自然への讃歌なのである。その最後の結びは次のようである。

May He not hurt us, He who made the earth,
Who made the sky and the shining sea?
Who is the God to whom we shall offer our sacrifice?

California のセコイアの森が Steinbeck に与えた靈感は、人間は大自然の底知れぬ力に翻弄される卑少な存在であるという意識を秘めていたようである。

(2)

大自然の強大な力も、それと戦う人間が強い人間でなければ、深い悲劇感を生むことはない。*The Grapes of Wrath* の農民の力強い生命力が旱魃や、洪水や、社会制度とぶつかって、深い悲劇感を生んだように、この作品でも、Joseph の strong character が悲劇を深いものにしている。

東部からやって来た Joseph は California の Nuestra Señora に土地を手に入れ、Thomas, Burton, Benjy の兄弟とその家族を呼び寄せ、その中心となって働くが、彼の心には fertility に対する熱望がある。仔犬をつれた母犬や腹の大きい牝牛は神聖であり、不妊は罪悪であると考え、遂には自分が牝牛になりたいとまで言って Burton を怒らせる。しかし、Joseph は fertility への熱望を語る。

“I want increase. I want the land to swarm with life. Everywhere I want things growing up.”⁴⁰⁾

この Joseph の意欲は人類の大古からの遺産であると述べられて、Joseph は個人ではなく人類の代表の姿をとるのであり、結婚についても Joseph の結婚は万人の結婚と述べられるのである。兄嫁 Rama は Joseph は all men だと言う。

“I tell you this man is not a man, unless he is all men. The strength, resistance, the long and stumbling thinking of all men, and all the joy and suffering, too, canceling each other out and yet remaining in the contents. He is all these, a repository for a little piece of each man's soul and more than that, a symbol of the earth's soul.”⁴¹⁾

Steinbeck は fertility を熱望する Joseph を人類の代表と描いているが、彼の自然崇拜や異教的信仰も、人間が本性として持つ宗教的傾向と考えているように思われる。汎神論的傾向を持ち、異教的いけにえを信ずる Joseph がキリストの image を与えられているのはこのためであろう。Elizabeth は結婚式の時に、Joseph にキリストの姿を見るのであり、Juanito も巨岩のそばで眠

る Joseph にキリストの失意と疲労を見るのであり、Father Angelo も Joseph について、もし彼が message を持っていれば new Christ の出現だと言うのである。

“Thank God this man has no message. Thank God he has no will to be remembered, to be believed in.” And, in sudden heresy, “else there might be a new Christ here in the West.”⁽⁴²⁾

Joseph は人類の代表として fertility への熱望を抱き、自らを fertility の原泉と考え、自らが土地の守護者であると考え、最後には自らが土地であると思込む。

“Listen, Juanito, first there was the land, and then I came to watch over the land, and now the land is nearly dead. Only this rock and I remain. I am the land.”⁽⁴³⁾

そして彼の自殺は、客観的には大自然の強大な力への敗北でありながら、主観的には、自らをいけにえに捧げて、自らと土地を救うという殉教的行為となり、人間が本質として持っている高貴な精神が示されるのである。

Joseph の自殺の場面はその状況を見事に描出している。

When he had rested a few minutes, he took out his knife again and carefully, gently opened the vessels of his wrist. The pain was sharp at first, but in a moment its sharpness dulled. He watched the bright blood cascading over the moss, and he heard the shouting of the wind around the grove. The sky was growing grey. And time passed and Joseph grew grey too. He lay on his side with his wrist outstretched and looked down the long black mountain range of his body. Then his body grew huge and light. It arose into the sky, and out of it came the streaking rain. “I should have known”, he whispered. “I am the rain.” And yet he looked dully down the mountains of his body where the hills fell to an abyss. He felt the driving rain, and heard it whipping down, pattering on the ground. He saw his hills grow dark with moisture. Then a landing pain shot through the heart of the world. “I am the land,” he said, “The grass will grow out of me in a little while.”⁽⁴⁴⁾

生命への激しい意欲と、知られざる神への献身を持つ a man of strong character の Joseph が敗北を勝利に変える自殺をすることを通して、大自然の強大な力と、大自然を恐れながら大自然と戦い、自己と人類の救済のために犠牲となる人間の姿が浮び上がるのであり、彼が人間の代表としてキリストのイメージを持って描かれる時人間精神の不屈な偉大さの象徴としてわれわれの心を打つのである。

Steinbeck は *To a God Unknown* において迫力のある悲劇を書いた。Joseph の California への入植に始まり彼の巨岩の上での自殺で終るこの作品において、Steinbeck は強大な大自然が、生命に対する激しい意欲を持った人間を圧倒する姿を描いている。彼は樹木が茂り草花の風

にゆれる自然を描きながら、それが早魃という自然の暴威を秘めた場所であるのを描き、さらに Joseph の自然崇拜や異教信仰を通して、知られざる神の存在を暗示し、祈りや捧げ物にもかかわらず襲いかかる早魃の状況に圧倒的に強力な大自然の力を書き込む一方、fertility への熱情を持ち、自らを土地や岩と一体化するほどの神秘思想と宗教的傾向を持ち、キリストの面影さえ宿す Joseph という人類の代表のような人間を作り上げ、彼の自殺を、敗北の自殺と描きながら、それに Joseph 自らの魂の救済や人類のための sacrifice の意味を与え、深い悲劇感の中に、人間精神の偉大さを描き上げたのである。

(3)

その迫力にもかかわらず、*To a God Unknown* が欠点のある未熟な作品であることは、Watt を始めとする多くの批評家が認めているが、それを明確に指摘しているのは Howard Levant と Warren French である。French はこの作品を原型家族の崩壊を描いていると言って、枝葉末節的な論を展開するが、最初に述べている言葉だけは傾聴に値する。

Actually, the novel is incomprehensible in realistic terms unless one supposes that the principal characters suffer from hallucinations. On the other hand, there are too many realistic descriptions of California landscapes and people for the book to be read as a purely symbolic fable. *To a God Unknown* is an overwrought allegory in which Steinbeck fails—as he does again in *East of Eden*—to fuse effectively realistic and symbolic elements.⁽⁹⁾

つまり、French はこの作品がリアリズムの見地から理解出来ず、象徴的寓話として読むにはリアリスティックな描写が多すぎると言うのである。これは確かに事実であり、われわれは *To a God Unknown* の迫力を評価するとしても、French のこの発言について一考しなければならない。

リアリズムの見地から理解出来ないというのは、恐らく Joseph の行動を指してのことであろう。1903年頃 Joseph は California にやって来るのであるから、20世紀の人間であることは確かだが、彼の汎神論的傾向や、異教的信仰にもとづく行動は、何か古代人的な感じがある。人間性の本質にそのような宗教的傾向のあることを否定するものではないが、南北戦争後35年を経て、大陸横断鉄道が完成し、辺境が消滅し、大都市では労働争議が頻発していた時代に、雨乞いとして動物をいけにえにする行動に説得性があるだろうか。主人公は白昼夢を見ているのではないかという French の言葉は認めねばならない。勿論、Joseph のような人間は居たかも知れない。しかし、20世紀初頭という時代において、Joseph の如き人間は普遍性を失っているのである。リアリズムの文学は、現実をしっかりと踏まえて、そこから普遍性を獲得すべきなのに、その現実が弱いのである。ここに Steinbeck の sentimentalism がある。観念が先行しているのである。

Joseph に strong character を与えるのに、彼を人類の遺産を受けつぐ代表的人間として非個性化し類型化したために、彼は血の通う生きた 20 世紀の人間ではなくなってしまったのである。

Howard Levant がこの作品は dramatic structure を必要としているのに panoramic structure で描かれるのが欠点だと言うのも、⁶⁶⁾ Joseph の人物描写の不十分さを指してのことと思われる。

普遍性のある作品は、具体的な現実をしっかりと見つめ促えた作品であることを Steinbeck はふと見失うことがあり、Joseph を非個性化してこの力作を傑作に出来なかったことは、まことに残念といわねばならない。Richard Astro はこの作品に Edward F. Ricketts の好影響という non-teleological thinking を見出しているが、もしそれが人物の非個性化、類型化をとまなうとすれば、作家としての Steinbeck にとってそれは悪影響であったのではなかろうか。

〔付記〕

To a God Unknown は批評しにくい作品であり、批評家の論文も論旨が明確でないものが多いが、主な批評家の論文の要旨、結論を紹介する。

F. W. Watt, *Steinbeck*

この作品はリアリズムの作品ではなく、ロマンチックな傾向を持っている。数々の欠点はあるが情熱的性質がある。そのテーマは Joseph Wayne の肉体的、精神的充足の努力である。

Joseph Fontenrose, *John Steinbeck*

この作品は永続的な family community を作ろうという California 農民の努力ということについて語られる神秘的な物語で、その努力を、人間の宇宙に対する関係として普遍化している。

Lester Jay Marks, *Thematic Design in the Novels of John Steinbeck*

この作品には宗教的存在としての人間の概念が描かれる。しかしさらに重要なのは、Who is He to whom we shall offer our sacrifice? に対する答えを各人が探求することである。

Richard Astro, *John Steinbeck and Edward F. Ricketts*

この作品の主な重要性は、Steinbeck が、自然を神聖化し、その深いものを認識し、土地を救い、自然の秩序を守る神のような幻の人物を作ろうとした努力である。

さらにこれは神話と象徴の構造で作りあげた現実超越の comprehensive な morphology で Ricketts との交遊の成果を見せ始めている。

H. T. Moore, *The Novels of John Steinbeck*

この作品は早魃の恐ろしい状況を描くが、象徴的表現が多く、その神秘主義は混乱し、個別になりすぎて理解しにくい。数々のよい表現があり、最後の早魃の場面は力強いが、impressive な作品とは言えない。

Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck*

この作品は、Who is He to whom we shall offer our sacrifice? の問題のみならず、人間の神に対する正しい関係の性質について書いており、その関係は種々の perspective を通して探求され、大早魃と Joseph の sacrifice で頂点に達する。

この作品の main action は Joseph の土地に対する mystic で ritualistic な関係が強まる状況を描いており、彼の原始的、異教的発展は、キリスト的人物の発展としても描かれる。

要するに、この作品は人間の ritual に対する必要や、経験を超えた状況に意味を与える必要に示される

“physical memories”の性質を探求している。

Warren French, *John Steinbeck*

この作品はリアリズムの見地からは理解出来ない。また象徴的寓話として読むにはリアリスティックな California の描写が多すぎる。この作品はリアリスティックな要素と象徴的な要素の融合に失敗したアレゴリーで、*East of Eden* と同様である。

この作品は原型家族の崩壊を描いている。最後の Joseph の自殺の意味は、人間の最高善は生き残ることではなく、本性に忠実なことで、人間は自然と一つになり自然と結合することで自己を充すのである。しかし、Steinbeck は Joseph が気狂いに見えるように書いたかも知れず、そうだとすればメサイヤコンプレックスへの風刺である。

〔注〕

- (1) Warren French, *John Steinbeck*, p. 47.
- (2) F. W. Watt, *Steinbeck*, p. 29.
- (3) *Ibid.* p. 29.
- (4) Richard Astro, *John Steinbeck and Edward F. Ricketts*, p. 94.
- (5) Warren French, *John Steinbeck*, p. 52.
- (6) *Ibid.*, p. 47.
- (7) F. W. Watt, *Steinbeck*, p. 29.
- (8) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck*, p. 48.
- (9) *To a God Unknown* (Bantam Books).
- (10) *Ibid.*, p. 23.
- (11) *Ibid.*, p. 66.
- (12) *Ibid.*, p. 172.
- (13) *Ibid.*, p. 164.
- (14) *Ibid.*, p. 179.
- (15) Warren French, *John Steinbeck*, p. 47.
- (16) Howard Levant, *The Novels of John Steinbeck*, p. 33.
- (17) Richard Astro, *John Steinbeck and Edward F. Ricketts*. p. 90~94.

* 本稿は、1985年5月20日昭和女子大で行われた第9回日本スタインベック学会に発表した論文に加筆したものである。